



ドイツ初期女性小説の一側面：  
ヘレーネ・ウンガーの『ユルヒュン・グリュンター  
ル』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00009994">https://doi.org/10.24729/00009994</a>

# ドイツ初期女性小説の一側面

——ヘレーネ・ウンガーの  
『ユルヒェン・グリュンタール』について

星野純子

## 1) はじめに

女性の手になる初めての成功した小説と言われる、ゾフィー・フォン・ラロッシュによる『シュテルンハイム嬢物語』が出た1771年から13年後、またひとつ、女性による小説が非常に人気を呼んだ。1784年にウンガー社から、匿名で出版された『ユルヒェン・グリュンタール ある寄宿学校物語』*Julchen Grünthal. Eine Pensionsgeschichte* (作者はヘレーネ・ウンガー Friederike Helene Unger、以下、作品名は『ユルヒェン』と略記する)である。『シュテルンハイム嬢物語』は、両親を亡くしたヒロインが都会の宮廷生活を経験し、様々な苦難に遭いながらも、最後には幸福な結婚に至るという物語であった。それに対し、『ユルヒェン』は、田舎の純朴な少女が都会のフランス流の寄宿学校の教育のせいで女性としての徳を見失い、転落していく過程を描いた物語である。前者のヒロインが、両親から受けた教育の成果として、女性の美徳をすでに我が物としていて、淑徳の女性としての自己を揺るぎなく最後まで貫くのにに対し、『ユルヒェン』は、まさにこの淑徳獲得の過程そのものが、テーマとして取り上げられた小説であった。

18世紀は教育の世紀といわれるほど教育問題が一般の関心をよび、おびただしい数の教育書が出された時代であった。女子の教育についても、18世紀後半のドイツでは、特に、フランスに対抗するドイツ・ナショナリズム、貴族に対しての市民階級、さらに、啓蒙の時代に同権を主張しだした女性に対して男性とは異なった領域の配当という、三つの側面からの論議が盛んであっ

た。その中で、この小説の、あやまった女性教育に対する警告というメッセージが、世のひとびとの興味を強く引きつけたのである。たとえば、通例は小説などは取り上げない『ゲッティンゲン学芸評論』も、「すでにたくさんの家族がそのために不幸になってしまった、恐ろしい結末を伴うフランスの寄宿学校の内部を見せる、という有用で重要な目的をこの作品は持っている…」と、「将来、よき妻、主婦、母になるであろうドイツの少女たちが、虚栄心の強いフランスのばか女に変身させられてしまう」<sup>1)</sup> あやまった教育へ警鐘をならす教訓的読み物として、市民階級の立場からこの小説を強く推奨した。

この時代、女性が小説を書き、出版することは、常にその教育的意図を強調し、女性の美德の鼓吹を前面に押し出すことにより可能になった。この小説も例外ではなく、「作者はこれを学者のためにではなく、誰よりも同性のために、著者と同じ女性市民のために書いたのです。女性の教化に寄与することが著者の心からの痛切な願いなのです」(1-4)と、前書きで述べられているとおり、一目瞭然たる道徳的メッセージを正面に押し出し、その点が高く評価されたわけである。

しかし、女性作家たちは、いつもこういう徳の鼓吹という表のメッセージとは別に、ひそかな自己主張を、なんらかの方法でそのテキストに紛れ込ませてきた。たとえば時々、主人公に「軛としての結婚」とか、「女性の側からの求婚」という問題提起をさせてみるという、素朴で遠慮がちなやり方(『シュテルンハイム嬢物語』)もあれば、女性らしく規範に従った生き方をするヒロインには幸福な結末を与え、自立を目指し、結婚を拒否する副人物は破滅させることで、全体としての秩序には順応しながら、実は破滅する人物の方を生き生きと描いてしまうことで、作者の共感のありかを暴露してしまうというやり方(アウグステ・フィッシャーの作品など)もある。また果敢に問題を提起して書きはじめながら、あまりに強く内面化された倫理のせいで自己主張が中途半端になってしまう場合(テレーゼ・フーバーの作品など)もある。<sup>2)</sup>

その中で、ヘレーネ・ウンガーのこの作品は、複層的な語りや風刺を用い

て、巧みな自己主張を行っており、そのため、この時代の女性小説にしては珍しく、淑徳にがんじがらめにされるような息苦しさを感じさせず、現代のわれわれにもおもしろく読める小説になっている。感傷的でない筆致、簡潔な文体、ユーモア、イロニーと共に、随所に、固定された女性の使命に対する異議申し立ての声がかなりはっきりと聞こえてくるのである。美德の鼓吹という教訓的意図も、それはそれとして、次の瞬間にはふっとずらされてしまうような構造や距離の取り方が、この小説にはあって、他の多くの女性小説を読むときに感じる、くぐくぐしい感傷のおしつけがましさを、げんなりする程の冗長さ、最後まで読み通すのが困難になるほどの退屈さの少ない、稀有な作品である。

さて、初期の女性小説についての研究は、ここ十数年の間にめざましいものがある。第2期フェミニズム運動の中で始まった文学史見直しの流れは、埋もれ忘れられたたくさんの女性作家やその作品を発掘して、書誌的データを修正、整理し、今日入手可能な作品の正確な把握という、地道で基礎的な作業を積み上げ、さらに作品の内容に関して豊かで多層的な読みの成果をうみだしつつある。本稿では『ユルヒェン』という物語をこのような成果を踏まえて読むことで、初期の女性小説の特質を多少なりとも明らかにしてみたい。

## 2) フリーデリケ・ヘレーネ・ウンガー

作者のヘレーネ・ウンガー (Helene Unger) については一般の文学史ではあまり取り上げられることがないので、まずここで簡単に、ツェントップ (Susanne Zantop) の記述に従って紹介しておこう。<sup>3)</sup> 彼女はプロイセンの将軍、ローテンブルク (Rothenburg) 伯爵を父に、フランスの陸軍中尉の娘、パラベール侯爵令嬢 (Marquise de Parabère) を母として、1741年にベルリンで生まれた。伯爵はパリで知り合った侯爵令嬢と、1735年に結婚していた。なぜ、どこで、両親が別れたか、またなぜ母親がヘレーネをベルリンに

残したかは不明だが、彼女は、牧師でかつ翻訳家でもあった、バンベルガー（Johann Peter Bamberger）の家で育てられた。彼の夫人も著述家だったから、ヘレーネは当時の女性としては非常に程度の高い教育を受け、教養を身につけることができた。彼女の出生については、判然としない点が多いのだが、ヘレーネ自身、この点については、口を閉ざして、自分の幼少期をできるだけ伝記から消し去ろうとしている。生年についても、1751年、1754年という説もあり、おそらく自分より若い夫との年齢差を隠すために、明言を避けていたふしがあるという。

彼女は1785年に、銅板彫刻家であり、鋳型製作者で、後にベルリン芸術学院の教授になるヨーハン・フリードリッヒ・ウンガー（Johann Friedrich Gottlieb Unger, 1753-1804）と結婚した。<sup>4）</sup>彼は1780年にウンガー出版社を創立し、ヘレーネも最初からこの出版社のために働き、ルソーやマリヴォー、ポーマルシュなどのドラマや小説を翻訳したり、匿名で雑誌の記事や、料理の本、自然カレンダー、兵学校のための読本などを執筆したり、一連の小説シリーズを企画したりした。1784年に匿名で出された『ユルヒェン』が、またその続編（1798年）も大成功をおさめて以後、彼女は人気作家として『伯爵夫人パウリーネ』（1800年）、『アルベルトとアルベルティーネ』（1804年）、『本人の語る美しき魂の告白』（1806年）など、十数篇の小説を、いずれも匿名で発表している。1804年に夫が亡くなると、ヘレーネが、ウンガー社の経営を切り盛りすることになったが、書店も鋳造所もウンガーの人のよさのために借金がかさんでいた。ヘレーネは様々な努力を重ねるが、報われず、1809年にはついに破産、個々の部門は一つずつ売り払われ、最後に印刷所と活字鋳造所が売り払われた1821年を待たずに、1813年に彼女は貧困の内に亡くなった。

主婦業の片手間に著述を手がけたのではなかったという、彼女のいわばキャリア・ウーマンとしての位置は、彼女の文筆活動の内容を豊かなものにし、小説のテーマも女性の役割観念との対決にとどまらず、女性作家にしては珍しく積極的に文学や美学の討論に関与した。ツァントップは文学史上での彼

女の位置を次のようにまとめている。

同時代の若い世代（ロマン主義）から離れようとする試みの中で、ウンガーは自分自身の文学的試みを展開させ、これが啓蒙の文学とフォアメルツとの間に橋渡しをすることになった。すなわち、風刺や社会批判をたくさん含んだ『合理主義的な現代小説』の展開へ、あるいは後期のテキストに見られるように、ロマンとエッセイ、フィクションと現実、私的領域と公的領域の間の境界を幾度も踏み越えるような、新しい小説形式を生み出したのである。<sup>5)</sup>

### 3) 『ユルヒェン・グリュンタール』

さてこの小説は、1784年にウンガー社から、『ユルヒェン・グリュンタール ある寄宿学校物語』として匿名で出版されて人気を博し、1787年には第2版が出ている。さらに1788年に続編と称する作品が出るが、これはヘレーネ・ウンガーとは無関係で、アンハルトの牧師シュトゥッツ（Johann Ernst August Stutz）による模倣作であり、小説の教訓的な傾向を強くしたもので、探し出され、大いに苦しみ、悔い改めたユルヒェンが、故郷で模範的な寄宿学校を設立し、その校長になるというものであったという。<sup>6)</sup> 他にもこの類の模倣作はあつたらしく、こういう事態を避けるために、初版から14年後の1798年に『ユルヒェン・グリュンタール 徹底的に改変され第二巻を付け加えられた第三版』が、同じく匿名でウンガー社から出版された。これは第1部もかなり書き改められて初版より110頁長くなり、さらに、ロシアへの逃避行から、悔い改めて故郷へ戻ったユルヒェンが、父グリュンタールを中心とする家族に暖かく迎えいられるという、第2部が加えられたものである。（Olms社から現在復刻版として刊行中の*Frühe Frauenliteratur in Deutschland* のシリーズには、この第3版が収められている。）

第3版は第1部も、言語文体的に一貫性をもつように書き直され、人物や

状況も極端な対比が加わったり、ユルヒェンの描写に心理的に説得性のある動機づけなどが加えられている<sup>7)</sup>とのことであるが、残念ながら初版は入手できなかったので、本稿ではこの第3版について検討することをおこわりしておきたい。いずれにせよ、作者は、初版に対する読者の反応や受容態度を取り入れ、いわば女性読者に寄り添いながら、自分の作品をつくっていったわけで、しかもそれがフランス革命を挟んでいることは興味深いことである。同じころ、例の『エリーザまたはあるべき女の姿』という大ベストセラーが、1795年、97年、98年、99年と版を重ねながら、フランス革命に動揺するドイツ市民社会に、作者の姿はかくしたままで、淑徳の権化のような完璧な女性像をしつこく送りつづけた<sup>8)</sup>のとは、好対照である。

内容を簡単に見てみよう。第1部は、フランス流の寄宿学校での教育により不幸に陥った娘ユルヒェンの物語を、父親グリュンタールが、ユルヒェンの手紙や日記、従姉の手紙なども挿入して、幾夜かにわたって、夜なべ物語として、友人の牧師夫妻に語るという枠組みを持っている。リンデナウの代官グリュンタールは牧歌的恋愛で結ばれた妻との間に息子2人と娘1人をもうけ、家庭の幸福を享受している。農業経営の傍ら、子供たちの教育に力をそそぎ、「あらゆる女性らしい美徳の兆しをもった」娘ユルヒェンの「美しい自然」(1-17)は、とりわけ彼の誇りとするところだった。彼は娘を「理性と教養をもったかしこく敬虔な主婦に育て上げ」、「夫の生活を甘美なものとし、子供たちを国家に役立つ市民へと教育する」(1-20)妻、母に育てあげてくれることを、教育の目標にしていた。13歳のとき、収穫祭の女王として行列の先頭にたつユルヒェンの愛らしい姿に、父はうれし涙を流し感謝の祈りを捧げるが、母親は「この天使のような少女を村で埋もれさせるのはかわいそうだ」(1-24)と訴え、ついに父親も娘と妻の共謀と涙には勝てず、譲歩して、ユルヒェンはベルリンのブレンフェルト夫人の経営する寄宿学校に入る。ところがそこでフランス流のだらしない生活態度に毒され、ユルヒェンは外面的刺激や官能性ばかりを追い求め、次第に軽率で享乐的な生活を送るようになる。その間に田舎の母親は病死、父は再婚する。

同窓の貴族令嬢マリアーネの兄である、ふしだらな遊び人の士官ルイとの恋に破れたユルヒェンを、父は、実直でまじめな牧師アイヒェと結婚させようともくろむが、ユルヒェンの拒否にあって崩れ、彼女はベルリンで所帯をもっていた従姉カロリーネ・ファルクの家に預けられる。しかし、徳高く信心深く敬虔で家庭的なカロリーネに反発するユルヒェンは、軽率な夫のカールと情熱的恋愛におちる。明晰な洞察力をもつカロリーネは離婚に同意、結ばれた二人の愛もしかし長続きはせず、カルタ遊びや社交などの自堕落で浪費的な生活のために、経済的にも破綻、カールは小間使いとして雇い入れた少女と失踪、ユルヒェンはあるロシア人伯爵の、結婚を約束する甘言に誘われて馬車で逃亡する。それを知った父親は娘の跡を追ってリガまでやってくるが、ユルヒェンは「お父様の怒りから逃れるために、世界の果てまで逃げていき、ロシアの地に私の恥辱を深く埋めるつもりです」(1-424)という手紙を残して、行方をくらましてしまう。

第2部は、田舎の地所に夫と住むミンナと、近くの別荘にひとり住むイーダ(実はユルヒェン)が、それぞれのこれまでの「非難すべき点がないとは言えない」(1-11)人生を語り合う、という趣向で話が始まる。実はミンナも今は田舎で夫のタールハイムと果樹園を営んでまじめな勤労生活を送っているが、大都会ベルリンで、夫婦とも危うく破滅しそうになるという重い経験を持っていた。純朴なミンナは世間知らずのまま結婚、顧問官夫人として入っていった、虚栄と歓楽の支配する世界に毒され、自分を見失う。芝居見物や社交生活など、気晴らしと暇つぶしに家政を省みず、やがておぼえたカルタ遊びに、時間もお金も浪費、生まれた子供も乳母まかせて家の中は目茶苦茶、夫婦の絆も緩む。自己嫌悪に陥り、空虚感にさいなまれながらも、不和と憎悪をかきたてられ、互いに浮気をしたりと、ずるずる坂を滑り落ちる。やがて、密会のためにでかけたいかがわしい場所で偶然夫と鉢合わせして、驚愕し、動転して気を失ったミンナは、幾日も幾日も熱病に苦しむ。公金を富くじに使い込んでいた夫も今や職を失い、熱病からよみがえったミンナとともに人生をやり直すことになる。ある人の仲介で官職につけるかもしれない



いと抱いた希望もあえなく消え、ついには悪徳の巢たる都会をはなれ田舎へ移住、仕事はきついが、近隣の人々にも支えられ、「美德と勤労が支配するところには幸福も住む」(2-170)と実感するような生活を手に入れたのだった。

ミンナがこう語り終えたときに、様々な人間関係や、また偶然も加わって、父親と従姉カローネなどが登場し、ユルヒェン父娘は突然の再会を遂げる。悔悟に恥じ入るユルヒェンは父とカローネに暖かく迎え入れられ、彼女の再婚相手のアウエルフェルト大佐にも紹介される。カールとの離婚後、塾を開いていたカローネの教育実践、土地貴族の大佐との出会い、結婚のいきさつなどが二人により語られた後、ユルヒェンは、ロシアへの逃避行から帰郷に至るまでの経緯を綴った手記を父に手渡す。

すべてをあきらめ、いまはただ運命に身を委ねてやっとたどり着いた美しい夏のペテルスブルクで、ユルヒェン(今はイーダと名乗っている)は、デメトリウス伯爵がすでに妻帯していることを知り、自分が愛妾という立場に陥りかけているのに愕然とする。伯爵の真剣な求愛と誘惑、今一步というところでかろうじてその誘惑の手を逃れたイーダは、伯爵夫人オイドクシアに預けられる。実は夫人は、伯爵との冷たい仲に悩み、イーダと夫との関係に疑いを抱きながらも、彼女の境遇に同情して、彼女のために尽力せずにはいられない、高潔で徳高い女性である。イーダはフランス人女の意地悪い策謀で、ドイツ人の仕立て屋と結婚させられそうになったりするが、オイドクシアのはからいと、片言のドイツ語をしゃべるロシア人司祭の助けにより、やっとドイツに戻ることができ、彼女の友人の、とある公妃に仕えることになる。ところがこの公妃は外面の美しさしか気につけない軽薄な女性で、美貌のゆえに気に入られたイーダは、彼女からレスビアンを仕掛けられ、驚きのあまり失神してしまうが、呼ばれた医者のお口添えでどうにか宮廷を去ることができたのだった。父のもとへと、はやる心を押さえて、徐々に故郷に近づこうと考えたイーダは、やがてこのミンナの住む村にやって来て、思いがけず父に再会し、「神の摂理が私をこの地方に連れて来てくれたのです。お父様が

私を傍らに住まわせてくださるならば、私の人生のあらゆる瞬間をお父様をお世話し楽しませるために捧げましょう」(2-337)と、父への帰順を誓うのだった。

この後、互いの消息を伝えるグリュンタールとアイヒェの手紙、親方の寡婦との結婚をめぐる兄フリッツのエピソードが語られ、最後に大佐の領地で収穫を祝うために集まった一同は、かつてと同じように収穫祭の女王として農民たちの先頭にたつ美しいユルヒェンの姿を見て、嬉し涙にくれるのだった。

#### 4) 語りの構造

このように全体としては、市民の純朴な少女を墮落させる誤った女性教育に警告を發し、悔い改めた放蕩娘が、古き良きドイツ的家族に再統合されたのを喜ぶ、というメッセージが流れている。

特に第1部では、ユルヒェンの感情の表出である日記や手紙も、父の語りの中に包み込まれていて、常に父親の解釈と感想を付加されるという構造になっているため、そのメッセージが一層浮き上がってくるのである。しかし、それにもかかわらず、父親に統べられているかに見える第1部でも、実は、父親の声によってすべてがかき消されてしまうわけではない。

まず第1に、ユルヒェンの声は徐々に大きくなって、父の声を打ち消そうとする。最初は父の願い通りの、あるべき自分でないことに罪の意識を感じ、不安になっていたユルヒェンが、「私は何も悪いことはしていないのに、お父様は多くを要求しすぎるのだから。私のような年頃では神さまのことをそんなに真面目に考えることはできないわ…」(1-196)とか、「青春はすぐ過ぎてしまうのにそれを楽しむのはそんなによくないことなのかしら…」(1-199)と、不満を述べはじめ、さらにマリアーネへの手紙では「…お父様の目には良き主婦と子供の母にまさるものはないのです。お父様の時代にはそれでみなよかったことでしょう。でもただ夫の食べ物や洗濯物の世話をした

り、子供たちのことで苦労することだけが女のさだめだとしたら、私たちに全く惨めな運命しか与えられていないことになりますわ…」(1-307)と、父の教育方針そのものを、はっきりと批判し始める。

次に、聞き手の牧師夫人も、グリュンタールを、「まず私たちはあなたの(寄宿学校についての)先入観が正しいかどうかを見てみましょう」(1-47)と、やんわりとはあるが牽制したり、「あなたは台所と子供部屋を、女性にとっての生得の場所だと思っていらっしゃるようですね」(1-238)と、異議をさしはさむ。

さらに、作者が地の文に聞き手の反応や態度を書き込むことで、グリュンタールの意見も相対化されることがある。「子供を家庭の外で教育させる両親にとって、あらゆる点でおそろしいことがあることは認めますわ。しかしフランス語教育は今では不可欠なものですのに、フランス語やその他教育に必要なものを子供はどのように学んだらよいのでしょうか」(1-113)という牧師夫人の質問に答えてグリュンタールが、翻訳で十分だとか、ペダントリーだとか、たとえ必要だとしても危険な時期に娘たちを母の監督下から放すほどのことはないとか、寄宿学校のフランス語は不十分で、教師に能力がないとか、家政には役立たないとか、階級混合教育の弊害で市民の娘が歪められてしまう云々の長口舌をくりひろげ、聞き手が辟易すると、作者は「グリュンタールは熱心に話していたので聞き手がどんなに眠たがっているか、牧師夫人があくびをこらえて散会の合図をおくるまで気がつかなかった」(1-118)と、さりげなく書き加えたりするのである。

だが、以上のようなグリュンタールに対する直接的批判にも増して、重要なのは、場面の設定や筋の展開、あるいは父親の人物像や発言内容そのものが、しばしばイロニーと戯画的要素を含んでいるということだろう。たとえばそれは登場人物の命名にも現れている。牧歌的な緑の谷(Grünthal)、緑の野(Auerfeld)、溪谷の郷(Thalheim)、ドイツの樫の木(Eiche)に対し、悪徳の都ベルリンの焼け野原(Brennfeld)、不毛な泥炭の郷(Moorheim: ミンナの継父)、獐猛な鷹(Falk)、といった具合の対比的な命名は揶揄を

含んでいる。また、ツェントップによると、グリェンタールの理想とする女子教育はすでに1784年の時点でも古めかしいものになっていたということであるが<sup>9)</sup>、グリェンタールの家長としての力自体も、かなり危ういもので、「ひとりの金持ちの少女が、私の心においてではないが、私の家政において愛する妻の位置を占めた」(1-187)と、まさに家政の必要上から再婚してからは、彼は完全な恐妻家になってしまい、妻を恐れてユルヒェンを家に連れ戻すこともできない(1-229)ほどなのである。あるいは、彼は、ユルヒェンの日記を読んで、娘がダンスで官能性をかきたてられたのを知って驚愕し、田舎での健全なダンスしか知らない妻に、都会の刺激的なダンスを踊ってみせるが、その描写を「…しかしもちろん私の非のうちどころなしとは言えない部屋着と、大きな総つき帽子とでは、非常に奇妙なものに見えたのだろう。彼女は途方もなく笑い出してしまったので、もうまじめなことに戻ることができなくなってしまった」(1-124)といった、自己イロニーで締めくくる。さらに、クリスマス休暇に帰郷したユルヒェンがすっかり、都会風の華美と洗練に身をやつしているのを彼は口を極めて嘆きながら、「…ユルヒェンの美しさと優雅さに私は驚いた。思わず私は自分の子供の前にほとんど身をかがめそうになった」(1-149)と、自分をまるで茶化すかのようなせりふを発したりもする。また、女子教育の理想を、「理性と教養をもった、かしこく敬虔な主婦に育てあげること、夫の生活を甘美なものとして、子供たちを国家に役立つ市民として育てあげること」(1-20)だと、正面から諷刺あげた直後の、「真のドイツの血筋のユルヒェンがあらゆる劣等な変種のなかでも最も劣等な種、ほらふきでおしゃべりなフランスかぶれのドイツ人になってはならない」(1-26)という極端でかたくなな物言いは、まっとうな意見と思えたものにまで疑問を呼び起こしてしまうのである。

このように、第1部でも、登場人物の話の内容や、作者のグリェンタールへの距離のとりかたが、しばしば、中心となる保守的メッセージを突き崩すような効果をあげていた。しかし、そもそものはじめから父親は、聞き手の牧師夫妻に向かって「…わたしの悲しい物語のすべてを話しましょう」(1-

9、強調は筆者)と、娘の存在のすべてを統べる語り手として登場し、ユルヒェンの日記も手紙も、必ず父の語りの中に包摂されるという構造になっていた。

それに対して第2部では、複数の人物がそれぞれの立場から発言を始める。全体(360頁)のほぼ半分(160頁)はミンナの語り、残りの半分がユルヒェンの手記、3分の1がカロリーネ達の語りに当てられ、父親の言葉も彼女たちの発言と同列に並んで置かれるだけである。ユルヒェンも第1部では、その時々感情の流れに任せて、断片的な日記や手紙を書くだけだったが、今度は自分の経験や行動を振り返り、手記としてまとめる。聞き手を前にした口頭での語りではなく、聞き手から距離を置き、聞き手の介入は拒んで、自分の人生に自分で解釈を下すのである。それは異国風の道具立てを駆使した冒険物語の様相を帯びて来て、起伏に富んだ場面が展開される。懺悔とつぐないのプロセスとして、自己の罪を恥じらいながら語っているはずなのに、ユルヒェンは、語ることで自楽を好みだし、自分の物語が父親に「私の物語」として篡奪されるのを拒んで、自らが主人公になり始めるのである。ホイザー(Magdalene Heuser)が論じているように、この第3版は、初版の寄宿学校物語、教育物語の、小説への改作であり、女性はもはや男性の成長や教養発展のための単なる一段階ではなく、彼女自身が教養と発展の主人公となる。<sup>10)</sup> 第1部では、父親は牧師夫妻にむかって、ユルヒェンの手紙を「…あわれな自己喪失の痕跡をますますはっきりと示すようになった彼女の手紙」(1-341)として紹介していた。この彼女の「自己喪失」が、実は自己を見出すための必然的な過程であったことが、第2部では明らかになる。迷うことが許され、また迷う権利を手に入れ、かつ、様々な迷いそのものを自分の人生として受け止める力を身につけて、女性たちは第2部で、語りだすのである。

## 5) 放蕩娘の帰郷とTugend 概念の変質

この小説は女性の淑徳の獲得プロセスそのものをテーマにした。そしてそうすることで、淑徳 (Tugend) の内容そのものも問題化されることになる。近代に入って、擡頭する市民階級は、貴族階級に対抗するアイデンティティーの根拠として、徳 (Tugend) という新しい価値体系を持ち出したが、これは、元来は理性的で啓蒙された人間を特徴づける社会的特性であり、男女ともに要求されるものであった。ところが私的再生産の場として市民的小家族が形成され、家父長制の再編が必要となるにつれ、ドイツでは18世紀末ごろまでに、平等の要求は女性には妥当しないことが明らかになってきた。初期啓蒙主義に称揚された、自立した、社会的にも性的にも能動的な女性、あるいは「学識ある女性」は、女性の理想像としての地位を、受動的で感傷的な女性に譲る。これに伴い、徳という概念も道徳的なカテゴリーとして、女性の場合には、淑徳、純潔、貞操 (Unschuld, Keuschheit) といった限定された意味を帯びるようになり、純潔が市民の少女のアイデンティティーそのものになってくる。<sup>10)</sup>

グリェンタールがユルヒェンに期待するものも、この線に沿っている。「娘の美德と義務の感情とを無知の上に築こうとは思わず、…美德の価値の基盤は、美と善の理性的認識にある」(1-238) と市民的啓蒙に価値を置きながらも、学識ある女性 — ブレンフェルト夫人がそれである — に対しては嫌悪をあらわにし、女性の美德とは、「ほんとうの天職」(1-73)、「妻、母という使命」(1-78) を忘れない家庭的美德であり、父親の務めと望みは、「きよく無垢なまま、彼女をしっかりと男性の愛に委ねること」(1-356) だったという。そして「私たちが一人で生きている限り、私たちの心にはさまざまな衝動や性向がまどろんでいるが、もし大世界や高貴な生の騒音がそれを起こすことがなければ、それは恐らく目覚めることはない。[...] 静かで家庭的な田舎の喜びの圏内なら、私の娘はその使命をきつとあやまたなかつただろう。なぜならこの真実の天職へと私は彼女を育ててきたのだから」(1-

68) と語るように、少女を「きよく無垢のまま」おいておくためには、自分の手元にとどめて、囲いこんでおかなければならないと、彼は思っていたのである。ところが、父の意に反して、父の手元から離れたユルヒェンは、「さまざまな衝動や性向」を目覚めさせ、女性としての「使命」を忘れてしまうことになる。

ところで、もし「さまざまな衝動や性向」がめざめても、なおかつ淑徳(Tugend)を忘れない場合にはどうなるのだろうか。それは、この頃の市民悲劇でしばしば取り上げられているが、ここでは、その典型例として、レッシングの『エミーリア・ガロッチィ』を見てみよう。『エミーリア・ガロッチィ』(1772)は啓蒙主義道徳と封建貴族階級との拮抗が、エミーリアという一少女を中心に据えて、貴族による市民の娘の誘惑という形で展開される。ここでも女性の美德は終始、純潔として定義され、ヒロインのエミーリアは、領主ゴンザーガの手からもはや逃れられないと悟ったとき、自殺を決意する。しかしそれは単に、ゴンザーガ侯爵の暴力に抗して純潔(Unschuld)を守るためなのではない。「どんな暴力も純潔を犯すことはできない」という父の言葉に彼女はこう答えるのである。

しかしあらゆる誘惑の及ばぬものではありません。暴力、暴力ですか？暴力に逆らえぬ者があるでしょうか。暴力と称するものは何でもありません。誘惑こそまことの暴力です。[...]私の身内には血が流れています。ほかのどの女にも劣らぬ若い、あたたかい血が。私の官能はやはり官能に違いありません。私には何も保証できません。何も請け合えません。私はグリマルディの屋敷を知っています。あれは歓楽の家です。あそこで母さまに見守られながら、一時間ただけで、もう私の心は沸きたちました。宗教の教えを何週間もいと厳しく実行してみてもほとんどだめでした。(第5幕第7場)<sup>10)</sup>

つまり、エミーリアが恐れるのは、純潔を失うこと自体よりも、純潔を徳と

する自分のアイデンティティーを揺り動かされることなのである。この場面に先立って既に彼女は、グリマルディーの屋敷での華やかな夜会に、さらに教会での侯爵の誘惑に、無感動ではない自分を感じている。エミーリアは、自分の「若いあたたかい血」、すなわち、自分の官能性やセクシュアリティの自覚に驚愕し、アイデンティティーの動揺に怯えるのである。そして美德を守るために、自分の肉体を放棄してしまう。市民道徳が女性に課した淑徳とは、女性が自分の命＝身体を犠牲にすることにより成り立つということになる。女性が自分の身内に流れる暖かい血を自覚し、自分の感性を信じて一人歩きをはじめれば、淑徳の囲いはすぐ壊れてしまうのである。こうしてレッスンはエミーリアがそのプロセスを始める前に、市民道徳の担い手である、父親の手によって、彼女の命を奪わせる。

『ユルヒェン』は、いわば、このエミーリアの気づいた「あたたかい血」を肯定して、ひとり歩きを始めてしまった少女の物語だといえるのではないだろうか。彼女は、田舎とは全く違う、都会での夜更かし朝寝という生活リズム、怠惰、無為、不健康な食事、化粧や流行を追う服装、散歩もモードを見せびらかすためという寄宿学校での生活に、はじめはとまどい、田舎での生活を恋しがると、やがて、パーティーでの刺激的なダンスに官能をかきたてられ、士官の甘い誘惑に魅せられ、そして、「感情の秘奥をかきえぐり、沸き立つ熱へとあおりたてる火のようなフランスの小説類」（1-261）の読書などによって、空想力をかきたてられ、これまでの世界からの脱出を考えるようになる。「恐らく運命により、私に定められている、市民の家政の卑しく惨めな仕事や、家庭生活の単調で無情な場面を想像すると、ぞっとします。父が私をどうしようとしているのかははっきりとはわかりませんが、ぼんやりと予想はできます。そしてそれに従うよりは死んだ方がましです」（1-261）と、彼女はマリアーネに書き送る。特に官能を目覚めさせる、読書の魔力と危険性は、この小説では大きな位置を占めている。自分と同じ名前のジュリーの物語、ルソーの『新エロイズ』に、「...どの言葉も私には魂から書かれたように思われ、どの言葉も私の心に燃えるように書き込まれた」



(1-268) と感じ、想像力を刺激されたユルヒェンは、恋人ルイに情熱的な手紙をしたため、やがて、カロリーネの家では、カールと共にゲーテの『シュテラ』を朗読することで、愛の情熱に抗う理性をなくしてしまう (1-400)。

第1部では、このユルヒェンのセクシュアリティのめざめや、外の世界への誘惑は、心の葛藤や苦悩として、手紙の中で、臨場感をもって、彼女の口から報告される。

私自身苦しんでいるのですが、ほかにどうしようもないのです。私が受けた最初の教育の先入見が時々、亡霊のように立ちあらわれ、私の魂を驚愕で満たしても、私の心はその歩みを止めることなく、先に進んでいきます。神様をご自分で、燃えるような文字で私たち女性の心に書き込まれたものが罪でしょうか？父が母を、彼のものになる前に愛したということが罪でしょうか？父は幸福になりました。私だって幸福になることはできないのでしょうか。どうして父は私にそんな不安をおこすような原則を教えこんだのでしょうか。それが私を苛み、青春の甘美な感情にひたるのを妨げるのです。(1-259)

第2部になると、様々な人物が、上述のような狭い徳の理解に対して、異議を挟むようになる。例えば、ユルヒェンがまだ自分の過去も語っていない段階で、既にミンナは彼女に対し、「徳の概念をあまりにも個別化し、ほとんどもっぱら純潔としか理解しないのは、少女教育のあやまりではないでしょうか」(2-110) と、ユルヒェンの教育にも妥当するような批判を明言している。

ユルヒェンの手記を読んだ父は、牧師のアイヒェにこう書き送っている。彼女がデメトリウスの誘惑を危ういところで逃れて倒れ、頭を打って失神してしまう、というくだりを読んで、「ユルヒェンは強かった。だが彼女が倒れて頭を打つまで私はぞっとしていた。彼女がもっと違った風に墮落する(倒れる)だろうと、ほんとうに思ったのだ。しかしこれこそ、彼女を再び

我に返らせた幸福な昏倒（墮落）ではなかっただろうか（Es war ein glücklicher Fall, der sie wieder zu sich brachte）。」（1-339）このころの小説では、リチャードソンの『パメラ』に典型的なように、誘惑の場面で女性が失神するのは、純潔が保たれたことを意味している。だからここでも、ユルヒェンの純潔が失われたのではないのを知って、父親は安堵したと、言っているのではあるが、「墮落」と「昏倒」をかけることで、作者は非常に巧妙に、墮落という経験を経て真の自己に達するのではないか、或いは、真の自己を見出すには墮落という経験も必要なのではないかという、第1部の父には見られなかった解釈への可能性を暗示するのである。

ところで、帰郷したユルヒェンを迎えた父は、自分の気持ちを、「悔い改めた放蕩息子を再び抱きしめたときの父親の気持ち」（2-196）と表現する。実際、ユルヒェンを受け入れる父親の態度は、聖書の放蕩息子の父の態度に似ている。娘の告白を聞く前に、父は、すべてを赦し、娘を抱きしめ、受け入れて、「ユルヒェン、私のあわれな子供よ、お前が神の前にへりくだって身をかがめたのなら、憐れみ深い方のもとで、罪はあがなわれたのだ。そして私たちはお前に心から和解の手を差し伸べねばならない」（2-197）という。これはまさに、ひとは、業によってではなく、信仰によってのみ義とされるのだという、ルター的な信仰義認の教理の表現である。作者は、転落と悔悟、回心、父のもとへの帰郷、赦しという、公認の宗教的枠組みを借りて父娘の物語を語っているのである。しかしまた、放蕩息子の話は、宗教の枠を越えて、普遍的な人間の問題として、自己のアイデンティティーを求めて未知の世界に出て行く息子の話として読み解くこともできる。<sup>19)</sup>ユルヒェンの場合も同じように、父からの脱却を試み、自立を願って遠い世界へ出かけた娘が、厳しく汚辱に満ちた人生の現実に直面して、悲惨な情況に陥るが、その責任を他に転嫁するのではなく、自分自身に引き受けることで、父のもとへの回帰を果たす、という解釈も可能だろう。

そう読んでみると、父親の姿が第1部と第2部では大きく変わっているのに気がつく。第1部では父親は、娘の独り立ちを容認せず、娘の旅立ちに際

して「私はおまえの心に、敬虔な心情と正しさを与えた。[...]おまえの考えや感情のすべてを日記に記しなさい。[...]そのような日記は友人の代わりとなり、人格化された良心の代わりとなるだろう。[...]そして時々、私にもこの日記を読ませて、私に慰めを与えておくれ。私の中に裁判官を見て、恐れてはいけない。私の心はおまえが恐れなければならない以上に強く、お前の心を守ってやるのだから」(1-43)と、娘の心の中までコントロールしようとしたり、(ユルヒェンの日記を受けとって驚き)「彼女の若い心を形づくり、自分の心のようによく知っている我々にだけ、(彼女の教育は)できるのだ」(1-120)と、娘をまるで自分の一部、自分の所有物のようにみなしていた。この家父長的な父が、第2部では、娘の存在を、すべてそのまま受け入れ抱きしめる、母性的要素を持った父となって、再登場するのである。

さまざまな経験を積んだユルヒェンは、もとのままではあり得ず、人間として確実に成長している。彼女は旅の途中で幾度も、自分がひとに誇り得るどのような才能も力ももっていないことを思い知り、過去の無為を悔やみ、自己の無価値を慨嘆する。また、自分の仕えた公妃は、マリアーネに似ていたと、手記に記すのだが、かつてのユルヒェンが、マリアーネの華やかさに惹かれて、彼女を模倣し、墮落したのに対し、今は公妃を冷静に分析して批判できる、というように、物事の本質を見抜く目を、経験によって育てている。このユルヒェンの成長は、例えば兄によっても、「ユルヒェンは僕には、以前より大きく、美しく、強くなったように思えた。それに彼女の声も以前よりもっと豊かで美しく響いた」(2-347)と確認されている。

その他の副人物の女性も、その美德は第2部ではより広い意味で解されている。「大佐は彼女の美德(Tugend)ゆえに彼女を崇拜しています」(2-244)と言われるカロリーネについても、グリュンタールは、「彼女は女性のあるべきすべてを体現している。私にはしばしば彼女の美しい素質のすべてが発展できるには、すべてがこうなるしかなかったように思えるのだ」(2-244)と、苦悩や離婚などの経験そのものを、彼女の徳の内容として評価する。また、兄のフリッツは実直で信仰あつい職人としての仕事ぶりを認めら

れ、亡くなった親方のおかみさんから財産を譲るための方便として結婚の申し出を受けた。このおかみさんについても、「彼女の生活態度はいつも静かで正しく、敬虔で善良です。私は彼女の正しい歩みをしばしばひそかに見ている、この評判のよくない都会にも、まだそんなにも多くの美德 (Tugend) があるのを見て、嬉しく思いました」(2-353) と、述べられる。カロリーネ、親方の寡婦、ユルヒェン、ミンナなどの女性の美德は、もはや純潔という狭い意味に限定されない、本来の意味での人間の徳性として取り扱われているのである。

女性の身体を犠牲にして、女性の命を奪うことによって、淑徳という Tugend を生き延びさせるのではなく、女性を、生き延びさせることによって、作者は美德 (Tugend) の意味を変質させたのである。これは、美德の鼓吹を旨とする、女性小説の伝統の中にあって、「ヒロインが、はじめて美德の理想から解放された」<sup>10)</sup> 例だと言えるだろう。

## 6) 女性の使命と女性小説

さて、グリェンタールはハレ大学で法学を修めた後、司法官となり、いずれはこの道で出世をと考えていたが、任地の代官に可愛がられ、彼の娘リースヒェンに恋をして、庭でエンドウマメを摘んでいるエプロン姿の娘へのプロポーズ、娘も父の承諾を条件に受け入れるという、古き良きドイツの、絵にかいたような牧歌的雰囲気の中で二人は結婚する。舅の願いどおり、グリェンタールは、司法官としての野心は捨てて、農業経営を行い、やがては舅の、代官という職を譲られる。つまり、この結婚成立の主導権は全面的に父親が握っていて、父親はお眼鏡にかなった婿に娘の所有権をいわば、譲渡するのであり、二人は父親の期待した筋書き通りに、恋におち、家庭はこの家父長制社会の枠内で、妻が夫に従属する形で、営まれる。

この頃の市民悲劇によく登場する母親のように<sup>10)</sup>、リースヒェンは母となっても、子供のように愚かで、軽率で、虚栄心が強く、娘の都会へのあこがれ

を助長して、結果的には娘を墮落させてしまう。それに対し、父親は伝統的な家長的父親であるだけでなく、愛情ある父親として、娘と親密な心の交流をもち、娘の真の幸福を考えている。父親は家だけでなく、娘をも統率するのに、母親は副次的役割しかもたず、物語の途中で亡くなってしまう。(ちなみに、再婚した継母にはグリェンタールは頭があがらないという風に戯画的に描かれるが、奇妙なことに、この継母は第2部では一切登場せず、影の薄い存在として作者は忘れてしまったかのようである。)

ところで、作者はミンナやカロリーネにも、様々な迷いと模索の後に、田舎で農業を営むという結婚生活を選ばせている。タールハイム夫妻は都会での顧問官という、上層市民としての生活に破れ、田舎で果樹園を経営し、アウエルフェルト大佐は軍務を退いて、亡くなった兄に代わって相続した領地を経営する。また、第2部の最後にはもうひとつちょっと変わった形の結婚が成立する。ユルヒェンの兄フリッツの結婚である。ギルドの一員になるために、職人が親方の未亡人と結ぶ結婚がグリェンタールたちに、受け容れ肯定される。これらはいずれも古い時代のいわゆる「全き家」の形態であり、田舎での農業経営というのは、一見、グリェンタールが第1部で展開した牧歌的世界の再現であるように見える。しかし作者は歴史に逆行するような方向で古いものをそのままの形で美化しようとしているのではない。ミンナもカロリーネも、人生経験を積んだ成熟した女性としてこの生活を自分で切り開くのだし、たとえば、カロリーネについて「荘園の住民たちは彼女を母と呼び、彼女はそれに値するのだ…」(2-244)と、グリェンタールに言わせているように、この世界は女性たちが大きな役割を演じ、夫と対等な協力者として働く空間である。また、フリッツの結婚も、結婚のひとつのあり方として「私は心から自分で働き、生産する階級を尊敬している」(2-353)と、市民の徳性と結びつけたうえで、父親の賛同を得る。

18世紀後半のドイツでは教養市民層を基盤に、近代的小家族が、あらゆる家庭の規範モデルとしての力を持ち始めていた。この家庭とは、「全き家」のような労働の場ではなく、幸福と安らぎを保障する情緒的な内部空間であっ

た。そしてそこで果たすべき女性の役割が、種々の啓蒙書や教育書で宣伝されたのであるが、その際、特に強調されたのが、夫や子供のために果たす情緒的・心理的課題であった。市民の妻にとっての第一の仕事は、情愛深い関与や世話などによって、夫の生活を楽しいものにするのであり、次が子供の教育であると説かれた。従来の「全き家」の家母に課された家政能力は、情緒的諸機能の次に位置づけられたのである。しかし、現実には、当時のドイツでは、このような家庭を営むのは、都市に住むほんのひとにぎりの教養市民層であり、総人口のたかだか1割を占めるにすぎなかった。<sup>16)</sup> 人口の大半を占める農家や都市に住む旧市民層のつくる家庭は、依然として「全き家」を営んでおり、そこでは、教育書の宣伝するような女性のあり方は不可能だった。特に、農村地帯については、フレーフェルト(Frevert)はこう述べている。

啓蒙書に記述されているような家族関係を、ここに求めても無駄である。まず第一に夫と子どもに気を配り、その後に初めて——こっそりと密かに——労働を行う、しとやかな妻、主婦、母といった像は、まったく農村女性には似合わなかった。むしろ農民の家母は、誰にも見えるように元気よく働いた。<sup>17)</sup>

このような現実を背景におくならば、ミンナたちの生活が一種のユートピアとしての意味を担わされているのは明らかだろう。一方でミンナの、顧問官夫人という結婚の形や、カロリーネの、都会での専業主婦という、ファルクとの結婚が否定され、他方で、フリッツの場合の、旧市民的家族の肯定によって、「全き家」がもちあげられたのは、古きよきドイツの単なる再現ではなくて、新しい近代家族というモデルの拒否を意味しているのではないだろうか。上層市民の女性は生産活動から離れて、私的空間に閉じ込められ、家長たる夫の寄生者へとおとしめられ、男の歓心をそそるロマンティックな存在であることを要求される。そのような女性像の拒否が、作者を「全き家」

のエコノミーのもつ家母の力の評価と、結婚という形のもっと違ったあり方、オールタナティブの提言へと向かわせたのではないだろうか。さらに言えば、ユルヒェンの行く手は未決定のままである。父のもとに戻ったとはいえ、ユルヒェンはオイドクシアにより、年金を与えられ、大佐からは家と庭園を贈られている。経済的基盤という自立の条件を与えて作者はヒロインの未来を開いたままにしているのである。

女性小説は、様々な教育書や啓蒙書などと同じように、新しい女性の使命を説くものでありながら、文学的虚構のもつ力によって、単なる教育的意図にとどまらない読みの可能性をも開いていたのだ、ということができるのではないだろうか。

テキスト：

*Julchen Grünthal. Dritte durchaus veränderte und mit einem zweiten Band vermehrte Ausgabe.* Berlin 1798. Bei Johann Friedrich Unger (*Frühe Frauenliteratur in Deutschland* Hrsg. von Anita Runge, Band 11-1, 2. Friederike Helene Unger *Julchen Grünthal*, Herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Susanne Zantop, Georg Olms Verlag 1991)を使用。作品からの引用は巻数と頁数を括弧内に示した。

- 1) *Göttingische Anzeigen von gelehrten Sachen*, 27.3.1784
- 2) 拙稿：ゾフィー・フォン・ラ・ロッシュの『シュテルンハイム嬢物語』執筆の動機について（大阪府立大学独仏文学研究会『独仏文学』第23号 1989）  
大澤慶子：悪女の造型（田邊玲子編：ドイツ／女のエクリチュール、勁草書房、1994年）山戸暁子：テレゼ・フーバーの手紙－ある女性作家の誕生－（大阪音楽大学研究 紀要第30号 1991年）などを参照。
- 3) Susanne Zantop: Nachwort zu: *Frühe Frauenliteratur in Deutschland*, Hrsg. von Anita Runge. Bd. 9, Friederike Helene Unger *Bekenntnisse einer schönen Seele* S.389\*ff.
- 4) Susanne Zantop: Nachwort zu *Julchen Grünthal* a.a.O., S.378\*
- 5) Susanne Zantop: Nachwort zu *Bekenntnisse einer schönen Seele* a.a.O.,

- 6) Christine Touaillon: *Der deutsche Frauenroman des 18. Jahrhunderts*. Faks. Dr. d. Ausg. D.Braunmüller Verl. Wien, Leipzig, 1919. Bern, Frankfurt a.M., Las Vegas, 1979. S.244ff.
- 7) Magdalene Heuser: "Spuren trauriger Selbstvergessenheit". *Möglichkeiten eines weiblichen Bildungsromans um 1800:Friederike Helene Unger* In:Hrsg. von Inge Stephan und Carl Pietzker: *Frauensprache-Frauenliteratur? Für und Wider einer Psychoanalyse literarischer Werke*. Tübingen, 1990. S.36.
- 8) 光末紀子:『エリザ、またはあるべき女の姿』という小説 (神戸大学「近代」発行会、「近代」第72号 1992年)  
三上雅子:『エリーザまたはあるべき女の姿』—公共の神話となったベストセラー—(大阪市立大学文学部紀要、人文研究、第44巻第8分冊 ドイツ語・ドイツ文学 1992) 参照。
- 9) Susanne Zantop: *Aus der Not eine Tugend... Tugendgebot und Öffentlichkeit bei Friederike Helene Unger* In: Hrsg. von Helga Gallas und Magdalene Heuser: *Untersuchungen zum Roman von Frauen um 1800*. Tübingen, 1990. S.81
- 10) Magdalene Heuser : a.a.O., S.36.
- 11) 美德の概念については、Sigrid Weiger: *Die geopferte Heldin und das Opfer als Heldin. Zum Entwurf weiblicher Helden in der Literatur von Männern und Frauen*. In: Inge Stephan und Sigrid Weiger: *Die verborgene Frau*, Berlin, 1982.  
Inge Stephan: *Frauenbild und Tugendbegriff im bürgerlichen Trauerspiel bei Lessing und Schiller*. In: *Lessing Yearbook* Bd.17. Detroit /München, 1985.  
Helga Meise: *Die Unschuld und Schrift, Deutsche Frauenroman im 18. Jahrhundert*. Frankfurt a.M. 1992  
Helga Meise: "Papierner" Mädchen, *Ansichten von der Unschuld im Frauenroman des 18.Jahrhunderts*. In: *Frauensprache - Frauenliteratur? Für und Wider einer Psychoanalyse literarischer Werke*. Tübingen, 1990.  
田邊玲子: 純潔の絶対主義 (『制度としての<女>』 平凡社、1990年) などを参照。
- 12) Gotthold Ephraim Lessing: *Emilia Galotti, Ein Trauerspiel in fünf*



*Aufzügen*. In: *Gesammelte Werke* Bd.2. Aufbau Verlag, Berlin 1954.S. 316. 日本語引用は白水社：レッシング名作集『エミーリア・ガロッチィ』（南大路振一訳）による。

- 13) 宮田光雄：新約聖書をよむ。『放蕩息子の精神史』 岩波書店、1994年
- 14) Helga Meise:*Der Frauenroman.Erprobungen der "Weiblichkeit"*. In: Hrsg. von Gisela Brinkler-Gabler:*Deutsche Literatur von Frauen*. Bd.1. München, 1988. S.444
- 15) Martha Kaarberg Wallach: *Emilia und ihre Schwestern: Das seltsame Verschwinden der Mutter und die geopferte Tochter*. In: Hrsg. von Helga Kraft und Elke Liebs: *Mütter-Töchter-Frauen: Weiblichkeitsbilder in der Literatur*. Stuttgart, Weimar, 1993.
- 16) ウーテ・フレーフェルト著、若尾祐司ほか訳：ドイツ女性の社会史、200年の歩み、晃洋書房 1990年、18頁。
- 17) ウーテ・フレーフェルト：前掲書、19頁。